

---



---

# 映 像 民 俗

---



---

## ニュース・レター『映像民俗』の発行にあたって

牛 島 巖

映像民俗学の会は、1978年に創立されて以来18年の時が流れ、この間会員各位の「映像民俗」に関わる様々な取り組みがなされてきました。しかし、会員間の議論や会の運営に対するコミュニケーションが活発であったとは言いがたい側面があることも事実でした。この問題は、ここ数年の総会や研究会で指摘され続けてきましたが、1996年度に京都で開催された総会でニュース・レターを発行し、会員個人の活動報告や本会の理念を含めた将来への展望を議論する場を充実することが急務であるとの意見の一致をみました。このニュース・レターは、この会員の総意を受けて誕生したものです。今後の本会の発展のために会員の皆様の積極的な参加をお願いいたします。

## 第18回「日本映像民俗学の会」総会報告

1996年4月20日(土)、21日(日)の2日間にわたって95年度研究集会・総会を、京都センタ - 主催で下記のように開催した。会場は両日も、京都教育文化センタ - (京都市左京区正護院川原町)。

### 1. 研究集会 4月20日(土)13:30 ~ 18:30

会員制作による9作品を上映(発表順)

1) 「沖縄民族劇団」	神部 恭久	VHS	34
2) 「神さぶる」	孝寿 聡	16 mm	32
3) 「原インドの世界 part 1 豊穰の馬・ラトワの儀礼壁画」	三浦 庸子	VHS	32
4) 「昔の稲作と用具の使い方」	諸岡 青人	VHS	63
5) 「中国貴州瑶族の結婚式の歌」	田島 知清	VHS	20
6) 「お守りをつくる・プユマ族のトオマラマオ」	蛸島 直	VHS	30
7) 「北の念仏芸能」	森田 純	Hi-8	15
8) 「鳩男」	久保田堅市	8 mm	4
9) 「奥三河の花祭り・上黒川のしづめ」	吉田 成己	VHS	50

上映会は一般の方も参加して行われ、盛会であった。

### 2. 懇親会(19:00~21:00)

作品上映後、同会議室にて懇親会を兼ね、大塚正之さん司会による作品検討会をおこなう。討議は各作品ごとに作者が簡単に自作の紹介をし、質疑批評を自由討議の形でおこなった。個々の作品について特に整理された、深まった意見が出されたわけではなかったが、全体として熱のこもった討論が行われたと思う。

### 3. 総会(4月21日(日)9:30~12:00)

#### 1) 会員の動静

・会員総数・・・53名(95.3.31現在)

- ・総会出席者・・・19名
- ・欠席・委任・・・20名
- ・返信未着・・・14名

#### 新会員紹介

小楠 恒雄（おぐす つねお） 地方公務員（小楠さんは95年度入会）  
 〒239 横須賀市久里浜 3-1-A207 ・0468-35-7796  
 神部 恭久（じんぶ やすひさ） NHKディレクター -  
 〒182 調布市布田 6-48-25-301  
 田島 知清（たじま ちせい） 映像作家  
 〒201 狛江市東野川 3-13-15 ・03-3430-8960（FXA 共）

#### 住所変更（新住所）

孝寿 聡 〒167 杉並区善福寺 2-23-15 ・03-3395-1012  
 松本清人 〒381-22 長野市青木島町大塚字大北 1318-18 ・026-283-1624

#### 2) 総会議事 （議長：丸谷 彰）

- |                |       |
|----------------|-------|
| 1 開会挨拶         | 牛島 巖  |
| 2 事務局報告        | 間宮 則夫 |
| 3 会計報告         | 大塚 正之 |
| 4 会計監査報告       | 多比良建夫 |
| 5 京都センタ - 報告   | 久保田堅市 |
| 6 東北センタ - 報告   | 森田 純  |
| 7 東京センタ - 報告   | 吉田 成己 |
| 8 次回開催地についての提案 |       |

#### 活動報告と討議の概略

- ・研究会、上映会、会の名称、会報の定期化についての事務局提案の三点を中心に討議がすすめられた。これらは共に会の活動の活性化と大きくかかわる問題であり、共通の課題を抱えるものとして、一括して討議がすすめられた。
- ・会の名称では「民俗学の会」の“学”が存在するために、堅苦しさどっちつかずの曖昧さがあり、外部者特に若者層を敬遠させているのではないか。現代の若者層は、学ぶということよりも現実的な見返りがなければついてこない、という意見などがあったが、一方で“学”の文字のあるユニークさ、映像と学問の接着という会の存在を尊重すべきという意見も出され、当面現状のままにしておくことに決定した。但し、今後活発化することが予想される国際活動への展開を考えると、英語表記の名称を正式に決めておく必要があるのではないかと、という意見も出された。
- ・会報の定期化は事務局が提案した、往復葉書による会員の動静のアンケートを通信にするのではなく、年に2回でよいから“会への希望”“会に対する意見”“抱えている問題点”など、率直な意見を出してもらおう。それには専任の会報担当を決め積極的に会員に原稿の執筆を依頼していく必要がある。
- ・会の名称の所でも触れたが、若い力を発掘していくためには会に魅力を作らなければ駄目であり、自らが魅力を持っていないければ人を引きつけることは出来ない。会の在り方を考え、会に魅力を作る必要があるのではないかと。
- ・会の活動の基盤は研究会であるが、それをどのようにして外部に拡げていくか、地域の独自性の中で考えていく。この事に関して、東北の森田さんから活動報告をふくめた意見として、東京・京都は上映活動と研究活動が一体化しえるが、東北は日常の暮らしそのものが民俗であり、いまその記録が緊急に求められている。東北の活動は制作が主体とならざるを得ないということが出された。

## 討議の結論

- ・会報については、巨純吉さんに担当してもらうこと。(事務局協力)
- ・会の英語表記名称については、大森康宏さんに候補を 2-3、次回総会までに考えてもらうこと。
- ・次回総会は東北センタ - 主催で、毛越寺の延年(1月20日(月)夜)の見学を兼ねて、岩手県平泉で開催することを決め、今年度の総会を終了する。

(文責 事務局 間宮則夫)

1997年度 総会の詳細は、次号のニュース・レターでお知らせいたします。

## 1995年度日本映像民俗学の会 会計報告

1996年4月10日現在

1995年度 会計 大塚 正之  
会計監査 多比良 建夫

1	前年度繰越し残高		158,098
2	収入の部		
	会費 24名分	2,500×24人	60,000
	会員作品上映一般参加	1,000×11人	11,000
	会報販売	700×5冊	3,500
	カンパ		2,490
	小計 A		76,990
3	支出の部		
	95年度総会運営費		36,820
	総会報告作成、郵送費		18,643
	96年度総会準備費		13,478
	その他		6,727
	小計 B		75,668
3	95年度収支 (A - B)		1,322
4	96年度繰り越し		159,420

## 京都センタ - 活動報告

久保田 堅市

1995年は関西大震災で年をあけた。そしていまなを大きな傷跡をのこしている。京都センター会員のなかにも家屋の倒壊や、損傷をうけた人がいる、不幸中の幸いは人命に関わることが無かったことであった。しかし震災のその後の多事多難は誰もが承知したように世紀末の様相をうかがうことができ、決して安穏な日々をかさねる状況でない。

ともあれ京都センターは、日をおいて『映像で見る営みの曼陀羅の世界』をタイトルに1995年6月17日午後5時30分から下記の作品の上映会を開催した。会場は日本映像民俗学の会総会場として馴染みの京都イタリア会館203号室である。

上映作品

- ・「テゴをつくる」(朽木村針畑の生活記録)丸谷彰作品・1984年
- ・「産物列島'95 洋食器の街で七転び八起き」山田哲夫プロデュース作品・1995年
- ・「飛鳥・風の香り～歴史のかなでるもの～」康浩郎作品・1988年
- ・「於与岐八幡宮の祭礼芸能」多比良建夫プロデュース作品・1995年

・「リンゴとバイオリン」(日本人シリーズ)大森康宏作品・1987年  
以上5本・上映時間延べ2時間30分余である。

新聞の催欄に「西陣」の上映も案内したこともあって、当日の上映作品の変更についてのトラブルを心配したが参加者に了承してもらった。会終了後出品者と参加者の懇談会をもったが作品の多様さが参加者からの感想を阻んだようであったが盛況裡に終了した。

作品出品会員が相互に上映作品を批評検証する時間を十分に確保できなかったが、映像民俗学の会の作品として今後の制作の要をどこにおくかなどの課題は、会全体の問題として今後煮詰めていく必要があると認識した。

## 東京センター活動報告

吉田 成己

東京センタ - の95年度の活動は次の2回の研究会であった。

- 1) 7月8日(土)映像で表現された祭り  
『花祭り』愛知県北設楽郡東栄町月(84分)1993年作品  
監督:北村皆雄 制作:三浦庸子 構成監修:山本ひろ子  
コメンテーター- 武井正弘(宗教芸能史)
- 2) 10月14日(土)映像で表現された祭り  
『ゆきははなである・新野の雪まつり』(130分)1980年作品  
監督・制作:野田真吉

このふたつの研究会は前年度好評だった遠山の霜月祭り見学会と、その際撮影された3本のビデオの研究発表会の流れを受けたもので、天竜水系を中心に三州、信州、遠州の国境いに伝承される著名な民俗芸能を、映像をなかだちにして、更に研究を深めようというものであった。2回の研究会とも参加者は30名前後。

野田さんの「ゆきははなである」はその徹底した克明なドキュメント精神と、2時間を越えるヴォリュームに、ひとつの祭りをまるごと記録して、それを作品にまとめ上げる際の手本として、改めて教えられる所が多かった。また大塚正之、巨真幸両氏のスタッフとしてのご意見も大変具体的で面白く、参考になった。

北村さんの「花祭り」は映像資料的な意味も含め、さすがにプロとしての水際立った仕事をを見せてもらったという気がした。

また、武井先生のお話は花祭り研究に顕著な業績を挙げておられる斯界の第一人者だけに大いに勉強になった。その際、資料として配られた解説書は山本ひろ子さんを中心とした神語り研究会のグループによって書かれたものだが、非言語的に伝承された民俗芸能を、言語によってほとんど極限まで解説しつくそうという意欲に溢れた刺激に満ちた論文であった。山本さんは北村さんの「花祭り」の構成と監修を担当された方でもあるが、この解説書を読んで感じたことは、400字詰め原稿用紙75枚ほどの論文のなかで当のビデオについて触れているのは「映像でも明らかかなように」という1か所だけだったことである。つまり、花祭りという民俗対象に対して、その調査と研究・解説は研究者としてわたしたちが受け持ちます。あなたたちは映像のプロとしてビデオづくりに励んで下さいという、役割分担がここで行われているということである。この分離は映像民俗学にとっては不幸というべきではなからうか。この問題を普遍化すれば我々の前に横たわる映像と言語の関係の問題に行きつくはずである。今後の我々の課題と言うべきだろう。

## 会員作品のデータベース作成にあたって

編集部では、本会の活動を広く世界に発信するため、これまで研究総会で上映した作品をふくめ会員作品のデータベース化を計画しております。今回は、その準備として第18回総会で上映した映像作品の資料を参考に編集部で「データベース資料(案)」を制作しました。資料として記録すべき情報項目で欠落している事項がありましたらお知らせ下さい。会員の皆様のご協

力をお願いいたします。

第18回総会で上映の映像作品（一部）

### 神部 恭久

1991 『老いてなお、花 沖縄・乙姫劇団』VHS/34分，NHK．

（1991年9月16日18：10～18：44・NHK総合・全国ネット）

沖縄にいくつか残る『沖縄芝居』の劇団のうち、乙姫劇団は構成員が「女性だけ」という点で特別な存在。大衆文化としての『沖縄芝居』が廃れていく（=集客能力を失う）中で、伝統を守る（=若き輝いた日々を忘れられない）“おばあ”のひと夏を、公演を中心に、描いた、いわゆるヒューマンドキュメンタリーの範疇にはいる作品。

撮影期間 1991年8月9日～20日

### 久保田 堅市

1995 『鳩男』8mmフィルム/4分，自主作品．

都市フオークロアとしての世相・「鳩男」によせて

都市の駅や地下道路わき、河川や公園の空地に見られる（ホームレス）家のない人たちは、当初地方自治体や民間団体が収容施設や食事を準備していた。市民も同情して寛大であったが東京新宿における強制的な施設送り込みは、一部の理解者に止まって実行された記憶は新しい。不況がもてでの倒産逃避から、人間社会の猥雑さと希望のなさ、家族間の不信等、その原因は多様をきわめその浮浪人口の減る様子はない。定年の切り下げや、リストラによる退職勧告、家庭における粗大ゴミ妄想はつるばかりで、民の俗社会は・褻・一色の時代となりつつある。

落ちこぼれていく都市生活者は、民俗学の対象にならないのか。大道芸人、縁日にみられる易者への行列、市民は今や家族あれど家族なし、家あれど家なき状態である。精神のホームレス化は日本の空を覆っている。

大都会のどまんなかでの老人の孤独な死、子供の自殺を伝えるニュースは絶えることがない。繁華街の街角で、終日座している青年も眼につきだした。高齢者から、若年者にその兆候はひろがりつつあると言っても過言ではない。都市の中心と周辺、路上を少時間ウオッチングしてもあてもなく彷徨う人間を観察することができる。

鳩と戯れる男に出会ったのも偶然であった。ここ数年の関心事、都市フオークロアとしての世相を映像でキャッチしたい。時に携行したカメラが役立った。こころ騒いで撮影したものがこの作品である。この男の周辺に眠り続けている男。その枕頭の国旗掲揚台に翩翩とひるがえる日本国旗は象徴的な風景であった。この男たちに一瞥だにせず行き交う通勤者なども収録した。平和の象徴でもある鳩も、いまや映像で見ると媚び肥満し、醜悪とっていい。これも世相・鳩世相・と言うべきか。駅頭で収録した以上のもの他もあえて割愛して「鳩男」に的を絞って編集した。今後も考現学—モデルノロジー—見地（現代の風俗や世相を、組織的に研究し、分析解説する）から、民俗映像として記録することを心がけたいと念じている。

撮影日： 1995年5月，場所・大阪駅前路上，

使用フィルム： フジクローム R25 サウンド，3巻（45，75m）

使用カメラ： フジカシナクル8 サウンド ZXM300

### 田島 知清

1995 『クイズで祝う結婚式』VHS/23分，自主作品．

中国貴州省南端の山間に住む白袴瑶（中国語で、ばいくうやお）の“新婚歌”の映像。

白袴瑶は、中国の少数民族のひとつ瑶族の1部族で、貴州省の南端から広西壮族自治区の北端のカルスト高原に住んでいて、人口は2万数千。白袴瑶という漢語の名称は、男性の穿く白ズボンから来ている。わたしが滞在した村は、行政的には貴州省持南（ちえんなん・キンナン）

布依(ぶい)族苗(みやお)族自治州荔波(リーポー・レイハ)県瑶山瑶族郷という。人口は約5,200人、ちょうど半数が瑶族である。残りは布依、苗、水(しゆい)の各族。村の瑶族は、新中国成立後、打狗(だごう)河沿いの水田を配分されたのを機会に、かなりの部分が山中から山麓や河岸段丘に移住した。村役場や小学校のある河岸段丘までは電気が来ている。わたしが滞在した期間は、95年1月から10月まで。旧正月(1月31日)を現地で迎え、10月収穫節をいっしょに祝ったあと帰国した。

白袴瑶の歌は、大別すると恋の歌と結婚の歌とに分けられる。瑶族の若者は、歌で自分の恋心を相手に伝え、反応をみる。一対一のかけあいもあるが、男の小集団と女のそれとの間で、かけあいをするほうが普通。内容は即興性に富み、戯れ歌めいている。結婚の歌は、儀礼性が強く、一定のきまりがある。謎かけと謎解きのかたちで、対歌がつづけられる。仲人をたてて結婚を申し込む時、結婚式当日新婦が新郎の家に向かう途中、新郎の家での披露宴、そのおりで歌が歌われる。

紹介するのは、新婦が新郎の家に向かう途中での歌。歌合戦のほか、新婦の村の女性が花嫁を連れて行く新郎側の使者に襲いかかって、行かせまいとする、などの風習もある。白袴瑶は、同じ姓同士(同じ氏族)の間では結婚しない。母の兄弟の発吉権が強く、母の兄弟の息子は、父の姉妹に娘が生まれた場合優先権を主張することができた。この風習はいまでも残っている。他の氏族との結婚はほとんどない。

カメラ：SONY TR2000。テープ：SONY Hi8 METAL-E E6-60HMEX, SONY Hi8 MASTER。

撮影時間：15時間。編集：ノンリニア編集(協力日本ビデオ)

- ・コンピュータの容量に限度があり、テロップの枚数が多いので、15時間のテープから1時間20分ほどを抜き出すことにし、約180のクリップに分けてコンピュータに取り込んだ。編集の過程で補足の取り込みを行ったため、クリップ数は約200(それにテロップのクリップ約100)となった。

### 三浦 庸子

1995 『原インドの世界 part 1 豊穡の馬・ラトワの儀礼壁画』VHS/32分、自主作品。

インドには<原インド>とも呼ぶべきインダス文明以前に遡る遠い考古学的過去と民族学的過去が五千万人を数える先住の部族民の暮らしの中に今も息づいている。インドの西部の代表的な先住民ラトワ(グジャラート州)の儀礼壁画を通してインド風土の根元的ないのちと出会う。

### 諸岡 青人

1995 『昔の稲作と用具の使い方』VHS/63分,(株)諸岡プロダクション。

私たちは、米を作り米を食べる伝統的な稲作民族です。日本固有の風土と四季の変化の美しい自然に育まれた稲作文化は、日本の伝統文化の根幹そのものです。長い時間を積み重ねて、私たちの先祖が考案してきた各種の稲作用具が日本各地の郷土博物館に収蔵されています。

機械化の進んだ今日、田植えから脱穀まで、皆機械でやっしまい、昔の稲作用具は見向きもされず、それら用具の使い方や、手仕事の稲作技術は、この後10年先50年先には全く知る人も居なくなり、昔の稲作を再現する事は不可能になってしまいます。今なれば未だこれら用具の使い方と、手仕事の稲作をしてきた方が健在なので、至急、昔の米作りを再現し、又、消えようとしている稲作にまつわる伝統民俗も取材して、日本の伝統的な稲作文化を、動態で保存伝承する意図をもって、映像で撮影記録します。

### 通 信

- 1 ニュース・レターを発行するはこびになりました。今後会員の皆様の投稿を歓迎いたします

す。また、編集部から直接原稿の依頼をお願いすることもあると思います。よろしくお願  
いいたします。

- 2 2年後の1998年は、日本映像民俗学の会が設立されてから20年という節目の年をむかえ  
ます。編集部ではこれにむかって、『映像民俗学』の出版を企画しています。時間的には1  
年余の期間があり、意識がやや希薄になってしまう恐れも危惧されますが、会員の皆様の  
投稿をお待ちいたします。

執筆要項

- 1 テーマ 映像と民俗に関する論考・ノート・批評
- 2 枚数 特に制限を設けない  
(400字詰め原稿用紙20~30枚を目安とする)
- 3 締切 1998年4月末日
- 4 提出方法 ワープロ提出の方は40字20行でプリントしたものを正本とし、  
フロッピーディスクとともに送付下さい。
- 5 提出先 『映像民俗学』編集部  
日本映像民俗学の会事務局  
〒166 東京都杉並区成田東5-8-15 間宮則夫方  
FAX 03-3391-6672

---

## 映像民俗

NO.1

発行日 1996年4月1日  
ニュース・レター映像民俗編集部  
日本映像民俗学の会事務局  
〒166  
東京都杉並区成田東5-8-15  
間宮則夫方  
電話・FAX 03-3391-6672

---